

隠岐世界ジオパーク現地視察に参加して

森脇 昭子

1. はじめに

晩秋の11月14～15日に、隠岐世界ジオパークの現地視察に参加した。ジオパークとは、「geo：地球、大地」と「park：公園」を合わせた造語で、日本語では『大地の公園』と訳される。地球科学的にみて重要な地質遺産を有するだけではなく、生態系や歴史・文化など人の営みと大地や地球との関係を学び体験することのできる総合的な公園と位置付けられている。

文字どおり今回の視察でもそれらの結びつきが強く感じられ、様々な角度からのアプローチが可能であり、見どころは多岐に渡った。このうち、印象に残ったキーワードについていくつか取り上げてみたいと思う。

2. 隠岐の植生は日本列島の凝縮版

隠岐の植生は、日本の森林の水平分布・垂直分布が混在しており、本土では高地でしか見られないような種が海岸端で見られたり、北方系の種と南方系の種が同所で生育していたりする。いわば日本列島の凝縮版とのことであり、往々にして本土での常識が通用しない。また、離島ならではの固有種はもとより、かつては大陸と陸続きであったことから、中国や朝鮮半島に分布する種と共通する大陸系の種や、氷河期の生き残りの植物も生育している。

表-1 隠岐の植物

南方系	ナゴラン、バリバリノキ、シャシャンボ、キエビネ など
北方系	イタヤカエデ、ハマベンケイソウ、エゾノヨロイグサ、アオダモ、ハマナス、ユキグニミツバツツジ など
高山・亜高山性	ミズナラ、カシワ、クロベ、ネズ、イタヤカエデ、ハリギリ、オオイワカガミ など
大陸系	ケグワ、チョウジガマズミ、モクゲンジ、カジノキ、オニヒョウタンボク、ミツバイワガサ、ダルマギク など
氷河期系	シロウマアサツキ、クロベ など
固有種	オキノアザミ、オキタンポポ、オキノアブラギク、オキシヤクナゲ、タクヒデンダ

※網掛は今回の現地視察で観察された種。

実際に今回の視察では、奥津戸海岸の水際からすぐの場所で亜高山性のオオイワカガミやイタヤカエデ、ミズナラなどが確認でき、久見海岸では氷河期の生き残りのシロウマアサツキや大陸系のダルマギクが多数見られるなど、一見何気ない場所で容易にこれらの植生を観察できた。



図-1 隠岐の植物

これらの不思議な植生が誕生した原因については、島の成り立ちや対馬海流の影響、アルカリ流紋岩の痩せ地の影響などが大きいと考えられている。隠岐生態系の成り立ちの経緯を「隠岐ジオパークガイドブック」(以下「ガイドブック」)より以下に抜粋する。

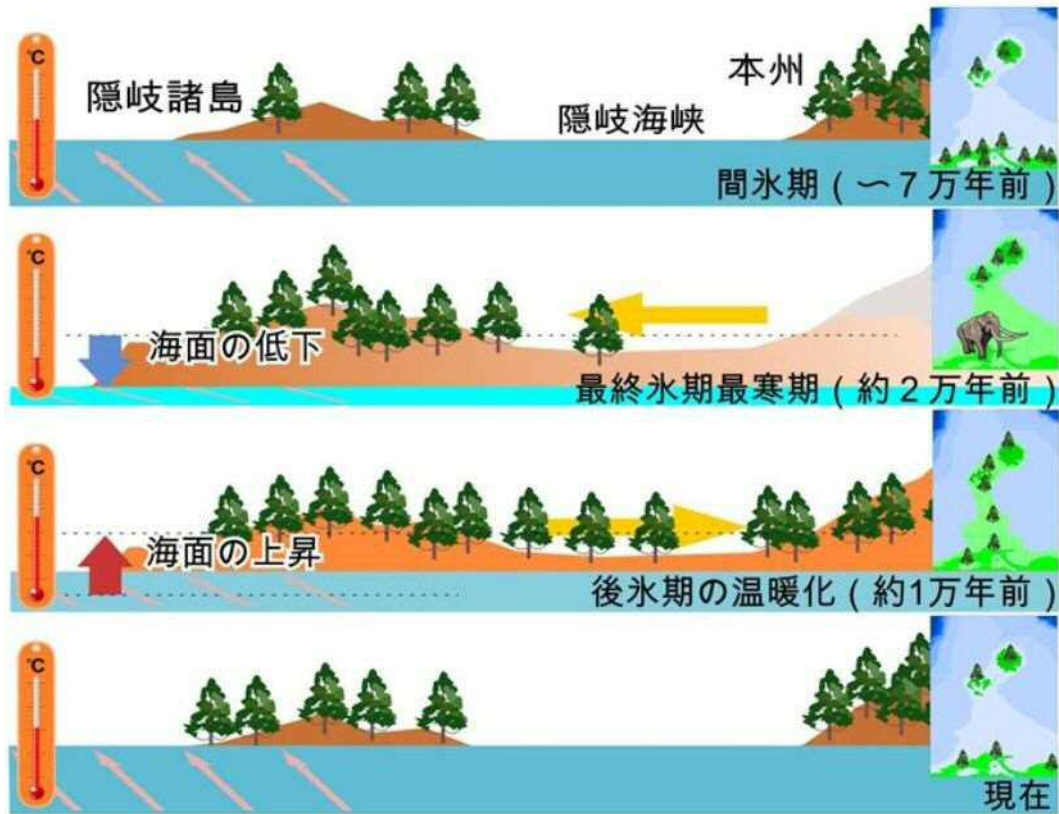


図-2 隠岐生態系の成り立ち

出典) 隠岐世界ジオパーク推進協議会 HP

表-2 隠岐生態系の成り立ち（ガイドブックより）

最終氷期	海水面の低下によって隠岐は島根半島と陸続きになり、気温の低下に伴い、寒く乾燥した本州内陸では生育できなくなった植物が隠岐へと逃避していった。
氷河期の終わり	気温の上昇とともに隠岐で生き残った植物が本州地域へと戻ったが、海面の上昇によって離島となった隠岐に氷河期時代の生き残りの植物や亜高山帯の植物がそのまま分布した。この原因として、隠岐の島後を形成するアルカリ流紋岩という地質が関係すると考えられている。
現在にかけて	その後の温暖化と暖流の影響によって、南方系の植物が北上し、隠岐に南方系の植物が分布するようになった。また、アルカリ流紋岩という大陸的な地質環境によって、大陸系の植物も海岸線を中心として分布した。

また、隠岐は湿度が高く霧の発生が多いとされる。今回の視察中も、数々の景勝地が霧に包まれて見ることが叶わなかった。霧の発生が局所的であったり、急に立ち込めたり晴れたりするので、こうした気候も植生に大きく影響しているものと考えられた。

3. 隠岐はウラスギ

日本固有種であるスギには、日本海側に分布するウラスギ、太平洋側に分布するオモテスギ（各地で植林されているのは本種）、九州に分布するヤクスギの3つのタイプがあり、このうち隠岐にはウラスギが分布している。前述の隠岐生態系の成り立ちは、このウラスギの研究結果から分かってきたことだそうである。

表-3 スギのタイプと特徴

ウラスギ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本海側に分布 ・雪に強い ・伏条更新を行う ・枝は上方に向かって伸びる ・葉が狭い
オモテスギ	<ul style="list-style-type: none"> ・太平洋側に分布 ・雪に弱い ・枝は水平方向に伸びる ・葉が広い ・幹が細い
ヤクスギ	<ul style="list-style-type: none"> ・九州に分布 ・枝が太い ・背丈が低い



図-3 伏条更新

出典) 隠岐ジオパークガイドブック

今回見学した三大杉と呼ばれる「玉若酢神社の八百杉（樹齢 2,000 年）」、「乳房杉（同 800 年）」、「かぶら杉（同 600 年）」は、いずれもウラスギの特徴である下部で枝が分岐した独特な樹形を形成していた。



図-4 三大杉と次点

また、自然回帰の森には約 800 本の天然スギが生えており、これらはオモテスギとウラスギの中間的な特徴を持つとのことであった。通常、スギの巨木林といえば社寺林などで下から見上げる場合がほとんどだが、ここでは横（あるいは上）から眺めることができ、壮観であった。

4. 隠岐最大のトンボ池・油井の池

油井の池は島後の西部に位置し、大規模な地すべりによってできた直径約 250m の池であり、1970 年代頃までは周辺部で稲作も行われていたとのことである。池の中央部はオオタチヤナギや湿生植物の生える浮島となっているが、その下は底なし沼で、近年実際に沼にはまってしまい危うく難を逃れた人もいたそうである。また、池の底は海に繋がっているとの言い伝えもあると伺った。

現在は貴重な動植物の生息・生育環境となっており、特に隠岐最大のトンボ池とのことである。ガイドブックによると、隠岐で確認されているトンボが 56 種であるのに対し、油井の池では 33 種のトンボが確認されている。これは隠岐で見られるトンボの約 6 割（止水性の種に限れば 7 割以上）を油井の池だけで観察できるということである。

時期と天候のせいもあり、残念ながら当日は一匹のトンボも見ることにはなかったが、繁殖・産卵場となる水草や抽水植物が繁茂し、周辺には成虫の生息場所となる森林環境も広がることから、これらのトンボ相の多様性が確保されているものと考えられた。



図-5 油井の池

5. 隠岐最大の哺乳類はウサギ

隠岐にはイノシシやシカのような大型哺乳類は生息せず、中型哺乳類についてもキツネやタヌキはいないため、最大の哺乳類はウサギ（オキノウサギ）とのことである。なお、知夫里島に現在たくさん生息しているタヌキは、元々飼っていたものが逃げて増殖したものである。以前、島後でもタヌキの移入があったそうだが、近年は確認されていないとのことであった。

また、隠岐を代表する岩石の一つである黒耀石は、古代よりシカの角を使って剥離させながら加工するとのことであった。隠岐にシカはいないのでは？と思ったが、そこは古くから人と物の行き来が行われていた隠岐であり、交易によりシカの角の入手は可能であったようだ。



図-6 シカの角で加工した黒耀石の矢じり

6. 久見のアシカ猟

島後の北西に位置する久見港は、かつては竹島への出航港であり、アシカ漁が行われていたとのことである。当地のマンホールのデザインにもアシカが用いられていたそうだが、残念ながら見落としてしまった。

前項で「隠岐最大の哺乳類はオキノウサギ」と書いたが、約半世紀前までは隠岐における最大の哺乳類はニホンアシカであったろう。本種は明治～大正期の乱獲等により減少し、1950年代頃までは竹島での生息情報があったが、現在では絶滅したものと考えられている。

なお、「改訂しまねレッドデータブック 2014 動物編」によると、同じく絶滅種とされているニホンカワウソは隠岐には分布していなかったようだ。本種は各地に伝わる河童伝説のモデルとして有名だが、河童伝説の多い隠岐にはいないことになる。

当地ではニホンアシカは別名「メチ（ミチ）」と呼ばれる。調べてみると、全国ではほかにも「ウミウソ」や「ウミカブロ」というのがあった。前者はそのまま「海のカワウソ」であり、後者は「海禿」という佐渡に伝わる妖怪である。また、東北地方などでは河童のことを「メドチ（メドツ）」と呼ぶ地域がある。同じ日本海の島国である佐渡島においてアシカが妖怪のモデルとなっていることや、同じズーズー弁を使う東北地方における河童「メドチ」の響きが「メチ」に通ずるものがあることから、隠岐の河童の正体はニホンアシカだったのでは？と想像させられた。なお、島後における河童伝説の位置をみると、河口付近のものも多いが、中流付近にも分布が見られる。河口付近については迷入がありえそうだが、中流付近については、かつて遡上が可能であったのか疑問が残る。



図-7 島後の河童伝説位置図

地図出典：国土地理院電子国土 Web



図-8 河童公園のカッパ像

(以前に撮影)

7. おわりに

今回の視察では、ガイドの方々に大変お世話になった。初めて訪れる場所もそうでない場所もあったが、ガイドの有無によって得られる情報量が大きく異なることを改めて実感した。説明看板等の台座に用いられている石へのこだわりなど、通常であれば気にも留めないような事柄から、カニの上手な食べ方などの生活の知恵(?)まで、説明内容は臨機応変かつ多岐に渡り、大変興味深かった。

自然回帰の森の登山後に、ガイドの方が「隠岐は交通の便が悪く、観光客の増加がなかなか難しい。現在、自然回帰の森を訪れる人は、少ないながらも、本気でやって来る人(=自然環境への意識も比較的高い人)だと思われる。観光客は増えてほしいが、その一方で、不特定多数の人が不注意に足を踏み入れるようなことになると、自然環境への悪影響が懸念されることもある。痛し痒しだ。」というようなことを仰っていた。

ジオパークに限らず、自然公園やラムサール登録湿地などでも、地域資源の保全とその適正利用とのバランスや棲み分けは重要な課題である。また、本来は保護・保存を目的としている世界遺産登録地においても、結果として観光地化が進み、保護と観光のあり方が問題視されて久しい。持続可能な保護と活用を図るためには、国内外の先駆的な事例を参考にしながら、地域の多様な主体が地域資源の価値や将来像を共有し、連携・協働した取り組みを地道に進めていくことが重要であると考えられる。

【参考文献】

- ・ 隠岐ジオパーク推進協議会 (2012) 隠岐ジオパークガイドブック
- ・ 島根県環境生活部自然環境課 (2014) 改訂しまねレッドデータブック 2014 動物編 ～島根県の絶滅のおそれのある野生動物～, 公益財団法人しまね自然と環境財団
- ・ 村上健司 (2000) 妖怪事典, 毎日新聞社
- ・ 野津龍 (1995) 隠岐島の伝説, 日本写真出版